

# 戦争で精神障害 日本兵も

## 療養中に死亡 元軍人ら1000人超

### 識者「被害直視を」

日中戦争や太平洋戦争の過酷な体験で精神障害を発症し、療養中に亡くなった元軍人・軍属が少なくとも千人に上ることが、厚生労働省の保管する55年分の統計から分かった。約7割は入院したまま死亡していた。終戦直後の死者や当時、日本の統治下にあつた台湾や朝鮮半島の人たちは含まれておらず、実際にはもっと多かつたとみられる。専門家は「社会から隔離され、家族と縁が切れたまま」亡くなった人もいる。戦中戦後も顧みられなかった被害を見つめ直す必要がある」と指摘する。

【25面に関連記事】



戦争で心身に障害を負った元軍人・軍属は、1963年に公布された戦傷病者特別援護法により、日本国籍を持つ者は公費で治療を受けられるようになった。厚生省は翌年から統計を作成しており、64〜2018年度分の中から精神障害に関するものを集計

した。それによると、療養中に亡くなった元軍人らは1006人に上る。約7割に当たる686人が入院中、320人が通院中に死亡した。病死や自殺など死因についての情報は統計にない。治癒したのは175人にとどまった。

療養者が最も多かつたのは78年度で1107人。九州7県では都道府県別の統計を取り始めた97年度が最多で72人。これ以降は減少を続け、18年度には九州に

治療を受けている人はいなくなった。全国では戦後70年を迎えた今も、島根県の1人が療養中だ。発症経緯なども統計に情

報がなく分からない。ただ、清水名實教授は「名譽の精神障害になつた日本兵の研究を」と追跡調査もした。埼玉大の清水名實教授によ

ると、戦闘への恐怖やそれ隊の活動の幅が広がり海に伴う疲労、上官からの私外派遣が増える今こそ、戦的制裁のほか、部下を死な争が日本兵の心にと与えた深

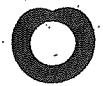
せた自責の念や加害による刻な影響に目を向けるべき罪悪感から発症するケースだ」と話す。

(久知邦)

# 西日本新聞

ラーメン記者、九州をすする!  
書店で好評発売中 ●ビジネス編集部

2020年  
10月 8日  
(木曜日)



DaiwaHouse.  
本和ハウスグループ

Grow  
a new  
Life

新しい生活を育てよう

賃貸住宅経営  
秋の実例見学会実施中  
10/31まで

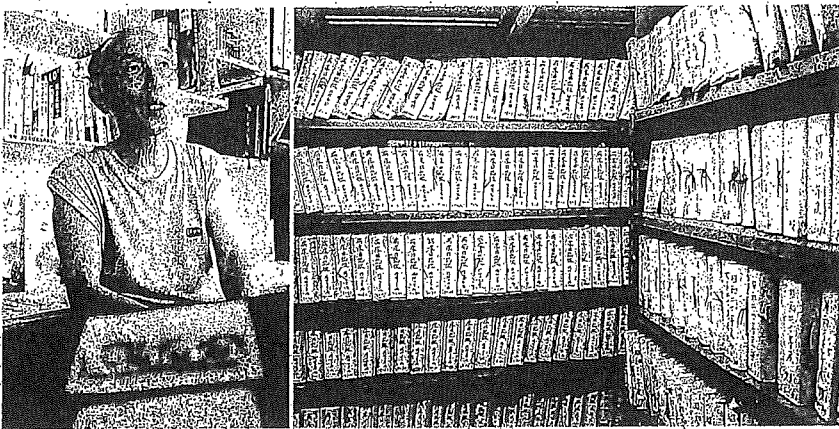
天気	朝	昼	夜	降水確率	風速/風向き	湿度	気圧	日照時間
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0
晴	12	18	10	0%	10	50	1010	5.0

隣、テ私ヲ殺ソウト相談シテイル声ガ...

# 復員兵 おびえ心壊れ

戦後75年

戦争体験のトラウマ(心的外傷)の悲惨さはベトナム戦争から帰還した米兵の事例で注目されたが、日中戦争や太平洋戦争に従軍した日本兵もまた、同様に苦しめられていた。精神障害の発症者は戦時中、千葉県の国府台陸軍病院を中心に収容され、戦後も偏見からほとんど顧みられることはなかった。戦後75年がたち、トラウマを抱えた元軍人らの家族が体験を語り合う活動も出ており、忘れられた戦争被害に光が当たりつつある。【一面参照】



◎千葉県東金市の浅井病院には、精神障害を発症した日本兵の医療記録が残されている。11月9日、自宅敷地内の交流館で、駄目人間とレッテルを貼り、俺は父の姿を見誤ったのではないかと話す黒井秋夫さん。11月8日、東京都武蔵村山市

## 家族「忘れられた戦争被害」継ぐ

《隣、テ私ヲ殺ソウト相談シテイル声ガ聞コエマス。衛生兵ニ殺サレルヨリムシ口自決シマス》

九十九里浜に近い同県東金市の浅井病院に、精神障害を発症した日本兵約8千人分の「病床日誌」が残る。戦闘の恐怖や部下を死なせた自責の念から追い詰められ、心が壊れていく様子が記されている。

初代院長の故浅井利勇氏は戦時中、国府台陸軍病院の精神科医だった。敗戦で処分を命じられた医療記録は職員がドラム缶に詰めて土中に埋め、焼失を免れた。浅井病院に残る記録は浅井氏が後に掘り返し、研究のために複写したものだ。

それによると、福岡県出身の陸軍中尉は中国で討伐戦に参加後、幻聴や幻覚が現れた。《今夜ハ必ス殺ンニ来ル》。不眠になり、仲間を襲われるという強迫観念におびえた。熊本県出身で農家から召集された兵士は戦闘で部下を失い、うつ状態になった。入院後の医師とのやりとりでは部下は死んでいないと話し《郷里ニ帰リタイ》と繰り返した。

病床日誌の研究を続ける川口短期大(埼玉県)の細淵富夫教授によると、戦時中、国府台陸軍病院に入院した日本兵は1万4503人。約6500人は兵役免

除となり、故郷に戻った者もいた。一方で入院したまま最期を迎えた人もいる。

「名譽の戦死」「戦病死は恥ぢられた時代に、精神を病んで国に奉公できないことに苦悩する日本兵の姿も病床日誌からは読み取れる。戦後も精神障害への社会の理解は乏しく、傷痍軍人として国の保護を受けることをためらったケースも多かったとみられる。戦傷病者特別援護法に基づき、公費で治療を受けた人は最も多い1978年度でも1107人にとどまった。

戦争末期には輸送船や燃料も十分になく、制海権も失い、外地からの移送も困難になった。細淵教授は「精神を病んでも、治療につながらなかった人は相当いたはずだ」と話す。

東京都武蔵村山市の黒井秋夫さん(70)は、旧満州や中国に従軍した父もまた、戦争によるトラウマを抱えていたと考えている。戦後に復員した父は定職に就かず、冬になると自宅にこもった。「家でもほとんど話さないし、何もしない。典型的なふぬけだと軽蔑していた」と話す。

見方が変わったのは父の死から四半世紀たった2015年。非政府組織ヒューマン・ライツ・ウォッチの船に乗り、航海中の学習会でベトナム戦争の帰還兵が心的外傷後ストレス障害(PTSD)に苦しめられている映像を見たことがきっかけだった。酒や

薬物に依存し、社会復帰できない帰還兵と父の姿が重なったという。

父が残したアルバムを見直すと、「ふぬけ」からは想像もできない精悍な顔つきの軍隊時代の写真が何枚も出てきた。直筆で使命感に燃える言葉も添えられていた。召集前に働いていた炭鉱で勤労表彰を受けていたことも分かった。

18年、PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会「を立ち上げ、同じ境遇の人たちと交流を続ける。元軍人の父らによる暴力や暴言に苦しめられた人は少なくなく、泣きながら電話してきた人もいた。

黒井さんは「一緒に暮らした家族も負の影響を受け、心に傷を抱えて生きてきた。一方で父に駄目人間とレッテルを貼り、理解しやれなかったと悔いもしている。忘れられた戦争の被害を少しでも伝えていきたい」と話す。(久知邦)